兵庫教育大学　研究紀要　第28巻　2006年３月　pp.167－178

パキスタンにおける結婚・家族とジェンダー
－2001年・2005年のフィールドワーク－

Marriage, Family and Gender in Pakistan
A fieldwork at 2001 and 2005

服　部　範　子*
HATTORI Noriko

The purpose of this paper is to clarify marriage, family, and the woman's life situation in Pakistan. The research method is based by the fieldwork, and it was executed two times at 2001 and 2005. The former research is focused in a northern mountainous area. The latter is focused in a urban area in Panjab State.

It is well known that there is a social custom among people of Islam that women are socially isolated from the society, which is usually called "purdah". And the woman usually hide the face and the body by the veil, when the woman goes out from the house.

Pakistan is a country constructed by people who believe Islam. The special focus of this paper is about marriage and the family life, education, and woman's daily social lives in Pakistan. These are examined focusing the difference between the mountainous area and the big city part in this paper.

The literacy rate is very low in the mountainous region, regardless of men and women. There is a common notion that it is not necessary to teach to the girl.

There are a lot of people who receive the education in the urban area. Although women who receive the higher education are gradually increasing, they usually marry around twenty, and stay home after the marriage. The husband's permission is necessary to continue working after the marriage.

The trends such as love match, international marriage and cooperated couple have been emerging little by little in the big city area.

キーワード：パキスタン，結婚，家族，ジェンダー，教育
Key words：Pakistan, marriage, family, gender, education

１．研究課題及び研究方法

南アジアは古い歴史を有し，多民族・多言語・多文化の国家によって構成されている複雑な地域である。人々の信じる宗教も，地理的な生活環境条件も多様であるが，伝統的な社会制度・慣習が根強く残り，世界的に最も貧しい地域という共通性がある。

本稿では，南アジアのうちでもパキスタン・イスラム共和国に焦点をおいて論じる。パキスタンはインドから1947年にイスラム教を信じる人々によって独立して建国された。綿花・米などの農業が盛んな農業国として知られ，歴史は古くインダス文明発祥の地であり，中世にはムガール帝国が栄華を極めた。国土は南北に細長く，北部は山岳地帯で，インダス川が北方から南方のアラビア海へ至る。

イスラム圏には「パルダ（purdah）」と呼ばれる女性を社会的に隔離する社会的慣習・習慣がある。すなわち，男性の生活社会と女性の生活社会が分離し，地域や宗派などにより若干の違いは見られるが，女性は家庭外に出ることや社会的に活動することが，日常的に男性よりもかなり制限されている。男性と接触する際や，家庭外に出かける場合に，女性はブルカやベールなどで顔や全身を隠さなければならない社会的慣習・習慣は広範に見受けられる。

イスラム教を国教と定めるパキスタンにおいて，このような女性の生活実態や生活環境について明らかにしようとするのが，本稿の目的である。

・わが国における南アジア研究・イスラム圏研究

まず，日本における南アジア研究についてみると，政治・経済や歴史などについての研究が中心で，地域的に

＊兵庫教育大学第５部（生活・健康系教育講座）
平成17年10月21日受理

はインド研究が多く，パキスタンについての研究はほとんどなされていない。南インドについてジェンダー視点での研究も地域的にはインドを中心にし，バングラデッシュについて若干の研究がある程度である（押川編 1997）。パキスタンについては，女性の賃労働に関する分析がなされている（織田1995，ファルザナ・バリ・織田 1996）。女性は日常生活を維持する上で必要な広範な活動に関わっているが，女性労働の多くは社会的には評価されない「アンペイドワーク」の状態におかれている。このような女性の広範な労働実態や日常生活を踏まえれば，女性の一側面を射程に入れているに過ぎない。

次に，イスラム圏に関する研究についてみると，政治・経済などいわゆる「男性の領域」については，多くなされている。しかし，女性や子ども，家族に関する研究は中東のほか，アジアではバングラデッシュなどについて，若干のフィールド調査研究がなされているにすぎない。このような背景には，外国人である日本人研究者には現地で研究すること自体が容易でないほか，女性研究者でなければ，女性たちに接触することや民家訪問することさえ困難が伴うといった事情が挙げられる。しかし，近年，徐々に関心が持たれ始めている（小谷編 2003，加藤編 2005）。

・本研究の位置づけ―中国・新疆ウイグル自治区の少数民族との比較研究－

筆者は中国の日本からみれば最奥地にある新疆ウイグル自治区において，2000 年度から少数民族のウイグル族女性の生活調査（科研・研究代表者 岩崎雅美）に一メンバーとして関わり，現在に至っている（岩崎他 2001，服部・宮坂 2003，宮坂・服部 2004，岩崎編 2004）。

中国・新疆ウイグル自治区において少数民族と呼ばれ，この地域に古くから居住してきた人々はイスラム教を信じている。彼らは中国の国境を越え，東方イスラム文化圏を形成してきた。また，かつてのシルクロード地帯は，現在，中央アジアと呼ばれ，旧ソ連邦に属し，近年，独立したタジキスタン，キルギスタン，カザフスタンなどのほか，中国新疆ウイグル自治区，インド，パキスタンなども含めて認識されている（間野・堀川 2004 13-14）。

本研究は中国・新疆ウイグル自治区と比較研究するため実施した一面もある。

パキスタンでは，2001 年と 2005 年の 2 回，結婚・家族生活や女性の現状について，民家訪問するなどして，若干の聴取り調査を実施した。

第 1 回 2001 年 4 月 27 日～ 5 月 7 日

北西辺境州及び北方地域（ノーザンエリア）の山岳地帯（以下，山岳地帯と略記する）

第 2 回 2005 年 8 月 1 日～ 8月 10 日

パンジャブ州イスラマバード・ラワールピンディー・ラホール（以下，大都市部と略記する）

以下では，この調査結果を報告する。

2．調査地について概観

1）山岳地帯

中国・新疆ウイグル自治区の最西端に位置する都市カシュガルとパキスタン・ノーザンエリアの都市ギルギットを結ぶカラコルム・ハイウェイは 1978 年に開通した。パキスタン北部の山岳地帯では，かつてのシルクロードが川岸近くに残っているところもあるが〔写真 1〕，陸の孤島のような閉鎖的な生活が営まれてきた〔写真 2〕。この道路ができた以後も，人々の車での移動さえ依然として大変，ハードな状況である。

写真 1
インダス川の川岸に沿ってシルクロードが残っている

写真 2　羊飼い

北部ではイスラム教も多様な宗派に分かれ，さまざまな少数民族が独自の言語，文化をもって生活を営んでいる。帽子やターバンのような頭布の巻き方，かぶり方などをみても，民族，宗派によって微妙に違っている。し

かし，人々の生活環境・条件は，貧しい生活をしている点と，イスラム教の宗派は異なっていても，総体的に保守的な考え方をしている点では共通している。

山岳地帯では人通りで大人は男性しか見なかったといってもよいほどで，子どもを抱いたり連れて歩いているのも男であった。それは，女性の社会的隔離により，女性は家内領域で生活しているほか，男性のみでなく部外者との接触も避けているためと思われた。私たちを見かけた場合には，逃げたり隠れたりすることがほとんどであった。ノーザンエリアのフンザの女性を除き（後述する），女性たちとはほとんど近くでは会わず話ができなかった。

新疆ウイグル自治区が中国に属するようになってから，現在，すでに半世紀以上，経過した。中国では特に1990年代以後，少数民族で女性であれば優遇政策がとられるため，女性の生活は急激に変わってきている。パキスタン北部は中国と国境を隔てているものの，距離的には極めて近い位置にある。国家や社会的な取組みにより，両国間の人々の生活状況に大きな差異が生じている。

2）パンジャブ州大都市部

パンジャブ州の人口はパキスタン全人口のうちの半分を占めている。州内の首都イスラマバードから隣接するラワールピンディー，そして，古都ラホールまで巡ったが，女性たちの生活状況についてのフィールドワークは主としてラワールピンディーで実施した。

ラワールピンディーは，首都イスラマバードと隣接している。イスラマバードはパキスタン建国後，新たに首都として計画的につくられ，外国人も多く居住している。しかし，イスラマバードで働いているパキスタン人は，ラワールピンディーに居住する人が多いという。ラワールピンディーは，古くからアフガニスタンのカブールからインドのデリーやカルカッタへと通じる交通の要所として商業が盛んであった。近年は軍隊の街として栄えてきている。

大都市部では民家訪問をすることや女性たちからの聴き取りも可能であった。

3．結婚・家族・子ども数など

1）山岳地帯

山岳地帯では，少し前まで，結婚年齢が男は16歳，女は9－10歳ぐらいであった。しかし，次第に結婚年齢は男女ともに上昇する傾向にある。その一因としては，このあたりの法律では16歳で一人前とみなされ，16歳以上にならなければ結婚できないと定められたことが挙げられる。子どもの結婚相手は親たちが一方的に決めるが，この法律により女性の早婚傾向は阻止されている。男性側の親・親族は，早くから息子の結婚相手にと思う女性に狙いをつけており，その女性が16歳になるとすぐに結婚させることが多いそうだ。

ある28歳の男性は，25歳の時，親が決めた16歳の女性と結婚をした。婚約の際には，男性側の親が女性側の家に行き，リングなどを贈った。その後，1年間を経て結婚したが，その間，本人同士の付き合いは全くなく，結婚当日に，2人は初めて会った。この男性は10人きょうだいの5番目で，きょうだいの一番上は35歳，一番下は12歳である。母親は57歳で，12人子どもを産んだが，初めの2人は死産で，その後の10人は元気に生まれて成長したという。

ある32歳の男性は，9人きょうだい（5人女，4人男）で，26歳の時，22歳の女性と，やはり親の決めた結婚をした。結婚式の当日に初めて結婚相手を見たが，最初から夫婦間はうまくいかなかった。しかし，現在，子どももいるし，妻は両親とうまくいっている。離婚するのは大変，難しいと，この男性は本当に悩んでいる様子であった。

結婚年齢は，男性が20歳代から30歳代前半，女性は16歳から20歳過ぎが多い。男性たちに女性の結婚年齢が早いのはなぜかを尋ねてみたところ，「女は早く老いるから」という。人々の日常生活を具体的に尋ねてみたが，女性は男性よりも早く起きて，家畜の世話をし，朝食の準備をし，そして，夜遅くまで，働きづくめの生活である〔写真3・4〕。このような生活実態が女性の早く老いる一因ではないかと推測された。

子ども数についてみると，30歳前後の男性たちは，自分たちのきょうだい数は10人前後が多かったが，自分たちの子ども数は2人ぐらいが多い。最近では子ども数は2人がよいという政策が推進されており，そのような考え方がかなり普及しているようだ。

ノーザンエリアでは，男児の誕生は吉報と考えられ，村中に鉄砲で音を鳴らせて知らせ大喜びする。しかし，女児が生まれた場合には，周囲はあまり歓迎してくれず，何もしないという。

写真3
畑しごとに出かける女性たち

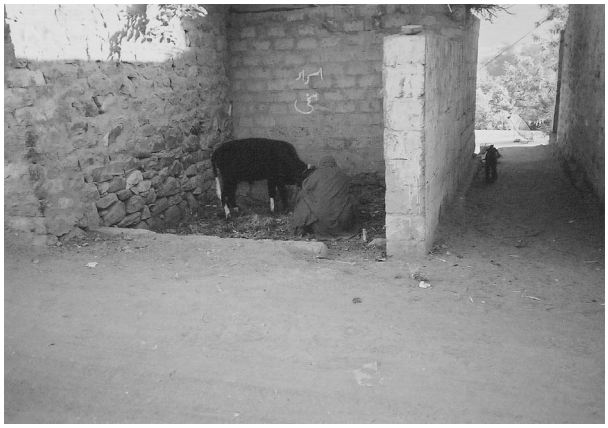

写真 4
早朝に牛の世話をする女性

写真 5
ある65歳の女性

2）大都市部

大都市部では，階層・教育水準などによって，結婚・家族のあり方も，人々の生活実態もかなり多様化しつつある。結婚相手は親が決めることが多いが，恋愛結婚する人も，若い世代には生じている。

ある 65 歳女性は，親の決めた結婚をし，18 歳から 35 歳までに，7 人の子ども（男 4 人，女 3 人）を出産した。若い頃から元気で，自宅で産婆さんに来てもらってお産をした。息子の一人はイスラマバードで働いていて，ベルギー女性と恋愛結婚し，現在，ベルギーに住んでいる。他の 2 人の息子はいとこにあたる女性と，女性が 17 歳の時に親の決めた結婚をした。そして，結婚後，同居，あるいは近居をしている〔写真 5〕。

ある 52 歳女性は，24 歳で親の決めた結婚をし，子どもが 3 人（男 2 人，女 1 人）いる。夫は外国で働いており，息子 2 人も外国で結婚し生活しているため，現在は娘と 2 人で暮している。彼女の母親は 14－15 歳で一番目の子どもを産み，約 25 年間で 10 人の子どもを産んだ。彼女は末娘で，母親が 40 歳頃の子どもであるという。両親ともに 90 歳頃，亡くなった〔写真 6〕。

ある 21 歳女性によると，都市部では 20 歳前後に結婚する女性が多く，男性の結婚年齢は女性よりも 5 － 6 歳位，年上が多いという〔写真 7〕。

恋愛結婚が増加する傾向にあるが，若い人々がたとえ相思相愛の仲であったとしても，親たちが OK した場合でなければ，結婚は難しい。

ある 30 歳代前半の男性は，20 歳過ぎの頃に好きな女性がいたが，その女性は親の決めた男性と結婚してしまった。このような場合，「かけおち」のようなことはほとんど不可能で，親の決めた結婚をせざるを得ないという。

パキスタンでは恋愛結婚するのが難しい。結婚相手を決め婚約に至るには，まず男性側の親が女性側の親のところに行って，結婚の承諾を得なければならない。男性の親が息子の気に入った娘との結婚を求めて女性の家に行ったとしても，女性側の親は，あまり知らない人には結婚を断わるのが一般的である。結婚後は女性が男性側の親と同居して一緒に暮らすため，親の決めたのではない結婚は，若夫婦と親はうまくいかないと考えられている。

パキスタンにおける結婚は，都市部においても，若いカップルが一つの家族をつくるという意味以上に，親族と親族の結びつきという意味が強い。子どもたちの結婚によって，親たち同士も親しく付合うようになり，日常的な相互援助・相互交流が盛んに行われることになる。結婚に際して，結婚当事者たちよりも，親たちの意向が重視されるゆえんである。結婚後，夫婦間にトラブルが起こった場合にも，親たちが仲裁してもめごとを解決しようとし，離婚は極力，避けようとされる。子どもたちが離婚すれば，自分たちの親密な親族ネットワークも壊

写真 6
ある52歳の女性

写真７
ある21歳の女性

れてしまうからである。

この国では親たちが本人の気持ちを考えずに決めた結婚のために，うまくいかない結婚に悩んでいる若い人が多いような印象を受けた。

・・ 複数妻について

イスラム教では男性は複数の妻が持てるという話は，パキスタンでは許されてはいるが，現実には極めて少ないようだ。山岳地帯で尋ねた人たちの間では，親世代にさかのぼっても，妻は一人で，複数いるという例は聞かなかった。また，一人がよいと答えるのが一般的であった。

ところが，大都市部では以下のような話を聞いた。

ある30歳代前半の男性によると，男性が複数の妻を持つためには，以下の2条件が揃っていなければならないという。

（1）男性は経済的にかなり裕福でなければならない。
（2）妻が第二夫人を持つことを同意してくれなければならない。

これに関連する事例にも遭遇した。

ラワールピンディーのバザールで雑貨商を営む65歳男性は，あごひげを赤いヘンナで染めていた。これは第二夫人を募集中であることを表しており，約半年前から染めているという。彼には7人の息子がおり，そのうちの4人と一緒に商売している。息子たちも50歳の妻も，自分が第二夫人を持つことに賛成しているという〔写真8〕。

さて，以上の2条件が揃い，男性が第二夫人を迎えた場合，男性のみならず第一夫人も，第二夫人との3人の関係をうまくやっていかなければならない。たとえば，男性は第二夫人に第一夫人と同じような生活環境・条件，たとえば，住居などを与えなければならない。日常生活においても，複数の妻を対等に扱わなければならない。たとえば，一人の妻と共に食事をすれば，別の機会には別の妻と同じようにしなければならないといった具合である。複数妻を持った男性の日常生活は本当に大変で，自分にはとてもできないと，ある30歳代半ばの男性が話していた。

第一夫人も，自分が夫に第二夫人を持つことを同意した以上，第二夫人を日常的に世話し面倒を見るなど，第二夫人とうまくやっていかなければならないという。

イスラマバードで出会った25歳の女性は第二夫人で，第一夫人とはいとこ同士である。夫は25歳の時，第一夫人と親の決めた結婚をしたが，自分とは恋愛結婚だという。3人の子どもを連れていたが，幼い男児は自分の子どもで，12歳と10歳の2人の女児は第一夫人の子どもだという。第一夫人は3人目の子どもを出産する際，死亡してしまったので，自分が第一夫人の子ども2人を自分の子どもと一緒に育てているというのである。子どもたち同士も仲良くしている様子であった〔写真9〕。

この事例をみる限り，複数妻を認めるのは，女性も妊産婦死亡率が高いなど，人がいつ死ぬかわからず生命がはかないものと感じられていた時代には，万一の場合を考えた生活の知恵といった一面もあったのであろうか。

４．子どものしつけ，教育

パキスタンの識字率は，1999年に成人全体では45％である。この成人識字率をジェンダーでみると，女性は33％，男性は57％で，女性は男性の半分ぐらいである[(1)]。

南アジア諸国は世界的にみても識字率が低い。同じように成人の識字率が低いネパールでは，近年，義務教育制度が実施され，子ども世代の識字率は急速に高くなってきている。ところが，パキスタンでは依然として義務

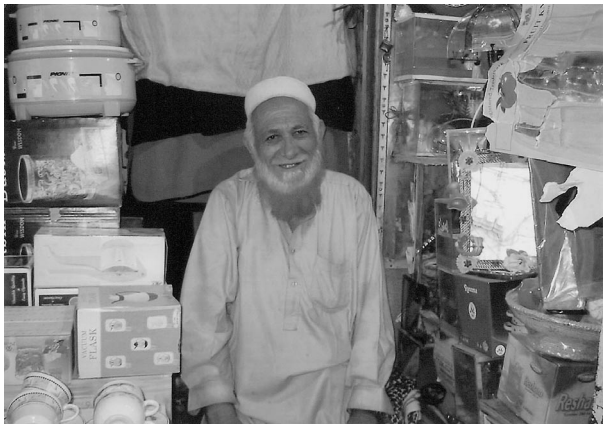

写真８
第二夫人を募集中の男性，あごひげをヘンナで染めている

写真 9
第二夫人は後列左，女児10歳（前列中央）と12歳（前列右）では服装が相違する

教育制度が実施されていない。女性には教育は不必要だとする考え方も根強くある。この背景にはイスラム教の宗派により教育に対する考え方に極端な違いがあることがあげられる。また，山岳地帯と大都市部との生活格差に起因する，教育に対する人々の認識の違いなども指摘されている。

1）山岳地帯

子どもの生活のジェンダーによる差異についてみると，女児の遊びは家庭内外に留まる傾向があるが，男児はかなり広範囲に出かけ，群れて自由に遊んでいる。幼い女児は私たちに近づいてきたりするが，就学年齢の頃からは逃げたり，遠方から見ていたり隠れている。それに対して，男の子は近寄って，笑って話しかけてくるなど，男女で全く違っている。

山岳地帯のダッス，チラスの辺りでは，男女を問わず子どもを学校に行かせないため，10％ぐらいの子どもしか学校には通っていない。公的な教育は欧米流の思考・生活様式に染まることだと反対し，「教育のイスラム化」が推進されているという。

北部では小学校から男女別学で，女子校の教員は女性にするといった配慮がなされている。それにも関わらず，女子には教育を受けさせようとしない傾向がある。教育を受けた女性は，家庭外に出かけたり，ブルカ・ベールをかぶらないで人前に出るのが平気になる傾向がある。大都市部の教育を受けた女性の中には，自分の意思でベールを取る人もいる。保守的な人々はこのような動きに反対し，女子に教育は必要ないと考えている。

さらに女児を学校に行かせない理由の一つに，女子を家の外に出すのを禁止・制限する考え方が強くあると聞いた。女性が家の外に出かける場合には，きょうだいや夫，父親などと一緒でなければならない。女性がブルカをかぶらないで外出すると，親・きょうだいに殴られる。女児を学校に通学させることさえ抵抗感が持たれているのである。

・フンザについて

山岳地帯で女性と接し話しが少しでもできたのは，ノーザンエリアのフンザのみであった。ここのアガハーン地域助成計画（AKRSP）について，若干の紹介をする。

フンザではイスラム教の中で，パキスタンにおいても少数派のイスマイリー派が信じられている。この派は開明的で教育熱心だと知られている。フンザと宗派が違う周囲の村々では，女性は隠れて出てこず，子どもたちは教育を全く受けていない。物乞いをしている子どももいる〔写真10〕。ところが，フンザでは学校や保健センターがつくられ，教育は男女とも 95％で，簡単な英語が教えられている。〔写真11・12〕。

女性の NGO 活動による，女性たちが帽子や刺繍などを売っている店の隣室では，女性たちが一緒に刺繍などをしていた。そこの女性たちは恥ずかしそうにしながらも，私たちに顔を見せて，簡単な話もすることができた〔写真13〕。女性たちは自分たちのつくった布織物などで現金収入を得ることができ，集まってお互いも話ができる。周辺地域の女性とあまりに生活状況が違うのには驚かされた。

2）大都市部の子ども

都市部でも，しつけのジェンダー差は見られる。男子は小学校に入学する頃から，徐々に父親の仕事を手伝い始め，将来のしごとの準備をしていく。たとえば，バザールにおける接客・販売は男のみがしている。男の子は小学生になると親に弁当を届けたり，店番をしたりして徐々に商売を覚えていく。12－13 歳になると一人前に客と交渉し，商売している子もいる〔写真14〕。それに対して，女子の生活圏・行動範囲は家庭内，家の敷地内に留まる傾向がある。

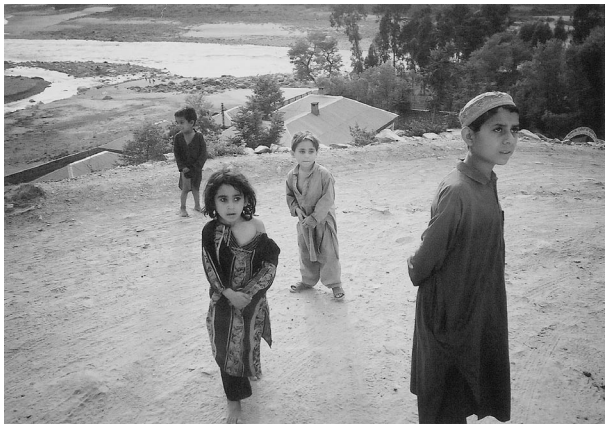

写真 10
物乞いをする子どもたち

写真 11
学校から帰宅途中のフンザの男の子たち

写真 12
フンザの子どもたち

大都市部の学校教育はかなり浸透しており，就学率は90％ぐらいである。公立高校は男女別学で，女子高校では女の先生ばかりで校長も女性である〔写真15〕。高等教育機関であるカレッジや大学には男女共学のところもあり，男女の先生がいる。

私立のカレッジには英語教育やコンピューターなど新しい教育をしているところもある。このような学校は授業料が高いが，競争率が高く，入学するのは大変，難しいとのことである。

パキスタンの伝統的医学による医者を養成しようとするKohsar Homoeopathic Medical Collegeも，1989年につくられている〔写真16〕。Dr. Munir Ahmed Ch.（44歳）によると，大学は国に認可されているが経済的な援助はなく，大学は経済的に苦しいという。全学生数は650人で，男女半々である。「朝のコース」，すなわち，昼間には女性のみ学び，「夕方のコース」，すなわち，夜間コースは男女共学である。学生は徐々に増え優秀な学生が集まってくるとのことである。

イスラム圏では，女性の患者は女性の医者でなければ診られないため，女性の医者が多いのだと聞いたことがある。この大学の教員・学生たちにこの件を尋ねると，皆が「患者は患者であって，医者は男女を問わず患者を診なければならない」と答えた。

写真 13
フンザで帽子を販売する女性
（女性が顔をみせ接客しているのは大変珍しい）

写真 14
家業の靴屋で男の子は父親を手伝い一人前になっていく

写真 15
高等教育を受ける女性たち

物乞いをしている子どもをかなり見かけたが，このような子どもも学校に入れて教育すべきだと，数年前から

新聞などでは問題にされており，都市部では義務教育の動きがある。

パキスタンでは，大人の多くが教育を受けていない。このような人々の間で，教育に対する無理解・教育を受けることへの拒否傾向があること，特に女性が教育を受けたり，外に出るのを好まない傾向が強いことが，教育上の大きな問題として指摘されている。都市部と山間部との生活格差，貧富の差異，社会階級・階層による差異，ジェンダーによる差異など，複雑にからみあっており，国家レベルで義務教育制度を定めるのは，依然として難しい状況にある。

5．女性の「結婚と仕事」

女性がカレッジ，大学など高等教育を受けて卒業後，多く従事する職業順は，1，医者，2，看護師，3，教師である。大都市部では女性も高学歴化し，近代的な職業に従事する女性も少しは生まれている。その典型例であるホテルに勤務する女性の場合，外国人が多く宿泊するホテルでは，欧風のパンツスタイルで働いていたが，これはまだ珍しいことである。あるホテルのフロント女性は，現在21歳で働いて1年になる。勤務時間は8時半から4時まで，車の送迎付きで通勤しているとのことである。女性が一人で通勤するのさえ，特別な配慮が必要なのである。

パキスタンでは，家の外のしごとは男性，家のしごとは女性という性別役割分担の考え方が強い。男性は成人すると働いて子どもや妻，そして，親たちを扶養するため生き，女性は子どもを産み育てる存在だと考えられている。男性は経済力がなければ結婚するのは難しく，生活力を持つことがとても重要である。

女性は早婚の傾向があるが，結婚後，仕事を辞めるのが一般的である。結婚後，男性は女性が家庭に留まるべきだと考え，女性も結婚すれば，家庭を守り仕事はしないと通常，考えている。

写真 16
パキスタンの伝統医学を教えるカレッジ

仕事のため外国に出かける男性は多いようだが，妻は家庭にいるもの，女性が家を守るのは大事な仕事だと，考えられている。ある52歳女性は，24歳で結婚後，夫はほとんど海外に出かけていたため，夫婦はほとんど別々に生活してきた。女性は家を守る必要があるし，子どものためにも，自分は夫と一緒に外国に行くことができなかったのだという。

医者や教師のような専門職に従事する女性さえ，結婚後は，夫の許可がなければ仕事を継続することができないという。結婚後，女性が仕事を持つことを認める男性は，きわめて少数派である。都市部の教育を受けた男性の間では，妻が仕事を続けるのを「許可」する傾向が最近，少しは生じている。

ある大学に勤務する44歳男性は，35歳の妻は医者で自宅で開業している。幼児が3人いるが，家庭のこと夫婦でしており，休日には洗たく，掃除，買い物など一緒にしているという。

6．パキスタンでの服装・服飾

パキスタンでは男女で服装があまりに相違する。

女性の服装はとてもカラフルで，装飾品も多く身につける。女性は10歳代前半から派手な首飾り，腕輪，ピアス，指輪，髪飾りをつけ，そして，ヘンナで手や腕には飾りの図柄が描かれる〔写真17・18〕。

経済的に余裕のある階層では，女性たちはアクセサリーを多く身に着け，美しく飾りたてている。「女性は人形だ」と言い切る男性さえいる。

女性の服装は，ドゥバッタ（スカーフ）とシャルワール（上着）・カミーズ（ズボン）というデザインは基本的に同じである。ドゥバッタのかけ方は多様で，モスクのような場所や，目上の人や偉い人に挨拶をする際には，頭全体を隠したり，顔も目のみ出して隠す場合があるなど，掛け方のTPOもあるようだ〔写真19・20〕。

男性の服装は通常，パキスタンの「国民服」といわれるシャルワール・カミーズのワンパターンである。単色で淡色系のいくつか色があるが，一人平均3枚ぐらい持っている。男性は一年中，同じような質素な服装をしており，自分の身なり・服装には頓着しない傾向がある〔写真21〕。近年では，遠くからみると単色の同じような服にしか見えないが，よく見ると胸のあたりに刺繍がしてあり，細かな柄の布地や織り方が凝ったおしゃれなものもある。欧風のワイシャツとパンツの組み合わせも，日常着としてかなり普及している。この場合には，上着はカラフルで派手な模様のものもある〔写真22〕。

結婚式の衣装は，花嫁，花婿ともに赤色が好まれる。女性は赤いドレスを，男性は白い服を着るが，ターバンは赤色で，結婚式の際は，頭のてっぺんで結び目を上に向けて結ぶ。

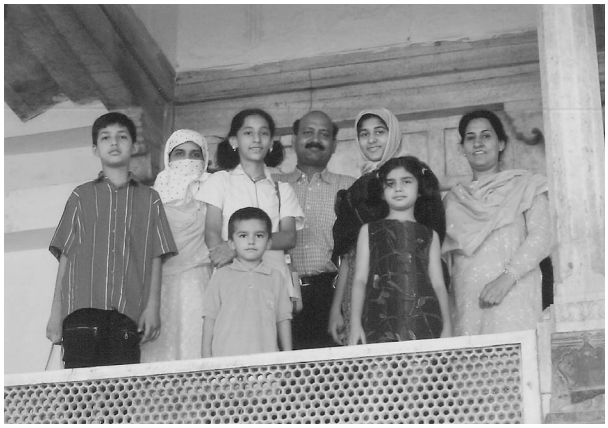

写真 17
女性の服装は配偶関係や年齢によって異なる

写真 18
ヘンナでおしゃれをした手，10歳代前半の女性たち

結婚に際しては，花嫁には女性側，男性側の両方から金の首飾りなど装飾品が多く贈られる。結婚式の披露宴では，一回目には女性側が準備した金の装飾品を身につけ，二回目は男性側が準備したものを身につけるという。金のアクセサリーは，結婚後の女性が身につけるものと考えられている〔写真23〕。

7．男女の社会的隔離

イスラム圏での男女の社会的隔離について，古くは裕福な家庭では住宅内においても「マルダーナ（男性居住域）」と「ザナーナ（女性居住域）」に分かれていたという。家の外は基本的には男性の領域であるが，大都市部ではこのような考え方は弱まってきており，男性領域への女性の徐々なる侵入が進行している〔写真24〕。

イスラム教徒は，一日5回お祈りすると言われるが，都市部では日常生活が忙しいなどの理由により，お祈りをしない人や回数の少ない人も多いようである。モスクでは，女性は髪をスカーフで隠し，男性は帽子をかぶらねばならない。そして，お祈りの前には，からだを水で洗って清潔にしなければならない。モスクでの礼拝には

写真 19
自宅の室内でもドゥパッタをかけている

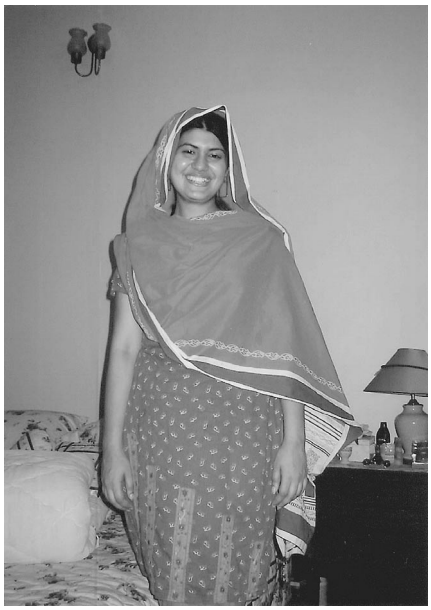

写真 20
ドゥパッタには多様なかけ方がある

男性しか入れないのが一般的であるが，イスラマバードのファイサル・モスクは，女性も隅の一部分に入って拝むことが認められている。

1歳女児の誕生パーティに招待された。会場には約300人の人々が集まっていたが，男女は壁で隔てられた別々の部屋に分かれてお祝いをした。舞台も男性用と女性用の2つに分かれ，踊り手は男性側と女性側と交互に踊った。音楽演奏は男性側でなされ，その間，女性側は女同士で会話を楽しむといった具合である。女児の誕生日を祝うケーキ・カットやプレゼントの包みを開けるな

写真 21
シャルワール・カミーズの男性と黒いマントの女性

写真 22
男性用の洋品店

どの儀式は，女性側でなされた（男性側には全く見えない）。このパーティでは，女児の父親が誕生を祝う儀式の時に女性側に来たが，それ以外に男女が一緒に祝ったり，男女が会場内で顔を合わすことはほとんどなかった。若年層では最近，男女一緒のパーティ行われることもあるが，年配の人々には，男女別のパーティにしなければ来てもらえないという〔写真25・26〕。

何人か一緒に乗る乗り合いタクシーは，女性の座るサイドと男性サイドが分かれている。

レストランで，女性は他人に食べるところを見られたくないと，夫婦で来ている場合さえ，テーブル全体をカーテンで隠してもらっていることがある。

バザールでは女性が一人で買い物している姿を見かけたが，街のにぎやかな通りですら男性が多く，女性の一人歩きは日中でも少ない。夕方以後は，女性の一人歩きどころか，女性のみでの外出も見かけなかった。

8．まとめ

本稿では，パキスタンの北部山岳地帯とパンジャブ州の大都市部におけるフィールドワークの報告をした。この国では都市部と山間部との生活格差，貧富の差異，社会階級・階層による差異，ジェンダーによる差異などが，複雑にからみあっている。この国が一つの国家・社会としてまとまるのは，日本と比較し，本当に難しいことであろうと思われた。

写真 23
金の装飾品は既婚女性しか身につけられない

写真 24
女子のみ（姉妹・従姉妹）でも外で遊ぶことが「できる」

都市部と農村部・山間部との生活格差・貧富差は，ますます拡大する傾向がみられる。それに伴い，一国内においてさまざまな政治的，社会的な対立を深刻化させ，宗教上の宗派対立や民族対立などとも複雑にからみあっている。

多くの大人は教育を受けておらず，識字率も低い。しかし，都市部の経済的に余裕がある階層では，国際的なネットワークの中で生活し，国際的な感覚・意識を持っている人々もいる。高等教育への進学熱も高まっている。義務教育を実施しようとする論議は，この数年来盛んに

写真 25
1 歳女児の誕生パーティ

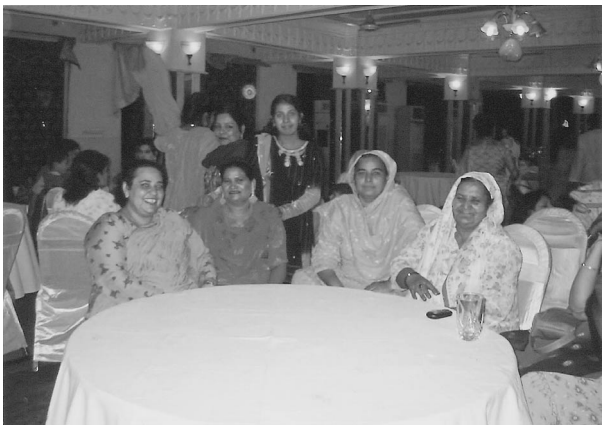

写真 26
パーティの女性会場

なされている。しかし，北部山岳地帯のイスラム原理主義的な考え方の人々は，教育を受ければ欧米化すると，子どもが教育を受けること自体に反対している。

女性の社会的隔離の慣習・習慣は大都市部においても多く見られ，女性たちの日常的行動・生活圏はかなり制限されている。すなわち，女性の日常生活は，一生涯，家の敷地内かその周辺を生活圏とし，社会生活も家族・親族ネットワークが中心となっている。そして，女性の腕や足を隠した服装は運動量が少なく，女性には運動する機会も少ないなどから，女性は身体・運動能力を発達させえない。また，家庭内外に制限された日常生活では，健康にも良くないであろうと考えられる。

結婚は親たちが決めた相手とすることが多い。家族・親族は男系のネットワークが意識され，女性は結婚後，夫方の家族員になると考えられる。そのことが，出生時での男児選好にも影響を及ぼす一因になっている。

結婚後の夫婦関係について，イスラム教では夫は女性にとって「アッラー」のような存在とされ，妻は夫に従って生活している。が，都市部では，高等教育を受けた人々の中には，結婚・家族のあり方もバリエーションが生じている。

既婚女性は夫方の親たちや夫方の未婚子と同居し，夫方のきょうだいは結婚後も同居か近居していることが多い。日常生活は親族ネットワークを中心に営まれ，親戚訪問や，結婚式，子どもの誕生やさまざまな節目でのお祝いが，日々の楽しみになっているように見受けられる。

大黒柱の男性（夫＝父親）が死んでしまうと，家族全体の生活が苦しくなり，その後の人生さえ変わってしまう。子どもの頃，親を亡くしたための苦労話を何人かの男性から聞かされた。女性にとっても，結婚後，夫に万一のことがあれば大変であろうと推察される。

最後に，本研究で，筆者が民家訪問させて頂いたり，話を聞くことができた人々は，男女を問わず高等教育を受けたきわめて限られた人々であることを指摘しておかねばならい。本報告は，パキスタン社会をほんの一部分を垣間見たにすぎない。

イスラム圏における女性の生活実態や人々の意識などについては，ほとんど知られていない。今後もパキスタン社会やイスラム圏における女性の生活環境・生活実態を明らかにしていきたい。

注（1）http://www.unicef.or.jp/servlet/G1DataBase.G1SelectCountry

引用・参考文献

ファルザナ・バリ・織田由紀子　1996　「パキスタンの綿花生産における女性の見えない役割－綿摘み女性労働者－」　『アジア女性研究』第 5 号　pp.81－88

ファルザナ・バリ　2003　「パキスタンにおける女性学の現状」　『アジア女性研究』第 12 号　pp.112－117

服部範子・宮坂靖子　2003　「中国・新疆ウイグル族の家庭生活とジェンダー－平成 13（2001）年度　南疆フィールド調査－」　『兵庫教育大学研究紀要』第 23 巻　pp.35－44

服部範子　2004　「南疆における家庭生活とジェンダー」　岩崎雅美編　『中国シルクロードの女性と生活』　東方出版　pp. 25－42

広瀬崇子・山根聡・小田尚也編　2003　『パキスタンを知るための60章』　明石書店

岩崎雅美・勝田啓子・久保博子・瀬渡章子・中田理恵子・服部範子・宮坂靖子・村田仁代　2001　「中国・新疆ウイグル自治区の女性と生活－その 3　平成 12（2000）年度少数民族に関する生活調査」　『家政学研究』第 48 巻第 1 号　pp.57－76.

加藤博編　2005　『イスラームの性と文化』（イスラーム地域研究叢書　6 ）東京大学出版会

小西正捷編　1987　『もっと知りたいパキスタン』　弘文堂

小谷汪之編　2003　『現代南アジア　第5巻　社会・文化・ジェンダー』　東京大学出版会
間野英二・堀川徹　2004　『中央アジアの歴史・社会・文化』　放送大学教育振興会
宮坂靖子・服部範子　2004　「中国・新疆ウイグル自治区におけるウイグル族の家族・世帯とライフコース－イーニン市におけるケーススタディー」『家政学研究』第50巻第2号　pp.163－169
押川文子編　1997　『南アジアの社会変容と女性』　アジア経済研究所
織田由紀子　1995　「パキスタンの女性労働概観」『アジア女性研究』第4号　pp.99－110
佐藤規子　1998　「パキスタン西部都市における女性の日常と信仰－バローチスターン州クエッタ居住のアフガニスタン移民・難民ハザーラ族の事例－」　『アジア女性研究』第7号　pp.37－43